

歴史地理学会とのかかわり

石井 英也



1958（昭和33）年に会員百数十人で発足した歴史地理学会も、2008（平成20）年でめでたく50周年を迎えることになった。歴史地理学会は、関東では関西に比べて歴史地理学への関心が薄く、それを学ぶものも少なかったので、関心のあるものが糾合して勉強会を組織したいとの意図から発足したとうかがっている。現在でも会員600名ほどの小さな学会であるが、無事、存続してきたことはめでたいことである。

このめでたい記念誌に「歴史地理学会とのかかわり」について一文を寄せてほしいという依頼であるが、私がこのような大役をはたすには厚顔無恥にすぎる。翻って考えてみて私は、はたして歴史地理学会のために何か貢献し得たことがあったのだろうか、忸怩たる思いに苛まされる。私は40歳代になって初めて、歴史地理学と直面せざるを得ない立場になり、歴史地理学会に参加するようになった。そのため、同年代の方々と比較すると会員歴も短く、20年ほどにすぎないうえ、その関与の仕方も消極的と自己批判しているからである。雑感を記して、責を果たしたいと思う。

ここ20年ほどの歴史地理学会の歩みを見ると、手弁当で学会の創設に尽くされた菊地利夫先生や中田榮一先生などの基礎作りが軌道に乗り、世代の交代が進んだ。学会そのものは小規模とはいえ、ある意味で安定した時期であったといえるのではないだろうか。これ

は停滞という評価を甘んじて受けなくてはならない側面がある一方、会員や役員によってそれなりの努力がなされてきたために、この激動の時代に、一見、平穩無事にみえる推移で済んだといえる側面もあると考えられるからである。筆者が歴史地理学会に関わるようになってからの変化をみても、学会の統合力を高めるためのシンポジウムの開始、紀要の廃止とその機関誌への統合、学生会員制度の導入、自前の編集体制の確立、歴史地理学の普及を目指した市町村での学会の開催などが次々と試みられてきた。これらの改革がなかったならば、現状はもっと寂しいものになっていたものと考えられる。

私は学会への関与が少ないとはいえ、歴史地理学というコースをもつ勤務校のせいか、学会の仕事のうち、とくに編集に関わることが多かった。こんな経歴から、投稿論文の閲読や編集作業を通じて歴史地理学を学びつつ、歴史地理学のあり方について考えさせられることが多かった。

ここ3、40年の地理学を巡る状況は、全く目まぐるしい。産業資本主義社会の最後の光輝と終末や、グローバル化などのなかで、学問の実用化が要求され、各学問分野の再構築や学際化が進んだからである。そのようななかで地理学においても従来の価値観が分裂し、研究方法の多様化が進んだ。この点では歴史地理学も例外ではなく、混沌のなかで、何を信じていいのか右往左往した人が多かったのが実状であったと思う。正直に云えば、私もその一人であった。ただし、歴史地理学は、そもそも歴史学との境界学問として学際的性質をもって成立したせいか、その研究が史資料の存在に制約を受けるせいか、地理学

の中では改変の嵐へのさらされ方はやや軽微であったように思われる。このことは、幸か不幸かわからないし、あるいは母体が小さいゆえに我々はそこに安住して、改変への努力が足らなかったのかもしれない。

それはともかく、ここ3、40年ほどの激動のなかで、伝統地理学における基本となってきた景観や地域の概念がやり玉に挙げられた。研究方法の多様化は積極的に支持すべきものであるが、私には白か黒かという判定は、蓄積してきた多くのものを失わせる側面もあるような気がしてならない。逆に私は、とくに歴史地理学にとって景観や地域概念は今日でもその重要性に変わりはないと思っている。ここ4、50年ほどの間に我々の社会は大きく変貌し、一見、過去の景観は悉く消失した感があるが、実際には現在の景観においてさえ、そこに痕跡を残す歴史的事象や過去を読み解く鍵となる要素は実に多い。問題があるとすると、それらの調査から何を発見したり、引き出せるかが問われているものと、私は考えている。実際、私の経験では、地理学における論文は実証の緻密化に関心が強すぎるせい、扱っている事象そのものの解説から離れられないものが少なくない。個々の論文は目的設定しだいでさまざまであるのは当然であるが、歴史地理学は、歴史学と地理学の境界学問である以上、最終的には成果を、時代や地域全体のなかで相対化させたり、位置づけたりして、時代や地域を再評価する構想力が問われることになるのであろう。それがひいては、歴史地理学の評価を高めることになるのではないだろうか。

もう一つ、度々考えさせられたのは、歴史地理学は境界学問とはいえ、歴史学との違い、あるいはスタンスの取り方である。私は史学系の教員組織に所属していることもあって、日頃には史学の先生方との接触が多く、何度か共同研究なるものも行ってきた。社会の特徴やそれらの時代的変遷を明らかにした

いという考えがそれほど異なるわけではないが、共同研究を行った場合、役割分担や出てきた結果は自ずから異なる。それは、視点の定め方の違いによるのであろう。私どもが自然環境や空間的観点を重視するのに対して、歴史学の専門家は人間の営為を切り口にすることが多い。また、前者が時代を通して物事を眺める傾向があるのに対して、後者は時代での専門分化が著しく、時代を区切ってものを考えやすいことである。それによって、歴史地理学では、歴史学では見えない発見が多くもたらされてきたことは、例を挙げるまでもなく、先輩達の業績から明らかである。しかし、人間や社会集団に対する光のあてかたが寡少なことは、歴史地理学が歴史学に比べて無味乾燥になりやすい原因ともなってきた。自分の反省を含めてであるが、この点は大いに改良の余地があるように思われる。

空間的観点は地図の多用に現れるが、単純な地図の活用は昨今、地図ブームといえるほど普及しており、もはや地理学の独自性とは言い難い状況になってきた。世界地図や日本全図、あるいは地籍図などの解明は進みつつあるとはいえ、巷にあふれる絵図などに関しても、その資料としての意味や活用法に関する徹底的な基礎的研究が必要に思われる。また、近年では自然環境に関して、歴史学をはじめとして多くの分野で環境史が取りあげられるようになってきた。学際化に伴って、伝統にあぐらをかいていられる時代は、間違いなく過ぎ去った。一方で、学問分野が細分化されてきた今日、かつての先輩達のように自然と人文にまたがる豊富な知識を背景とした研究を行うことは容易でない。難しいことであるが、従来蓄積を咀嚼しつつ、新しい地平を拓く努力が必要であろう。このような課題は、個人の力を越えており、何らかの仕組みを考えて学会を挙げて取り組むべきものかもしれない。そういう意味では、学際化は歴史地理学の存在意義を着実に脅かしつつある

わけで、我々はいかに内容を充実させ、隣接諸科学や社会にその存在をアピールできるかを考えていなければならない。

自分のことは棚に上げて、日頃の雑感を2、3書き連ねたが、編集委員の時にいつも困ったことは、投稿論文の少なさであった。歴史地理学会は小さな学会で、大会の際の会場も少ないかわりに、多くの参加者が一堂に会して真摯に意見交換できる利点がある。他の大きな学会の大会時のように、お茶を飲む姿も少なく、自主巡検に出掛ける者も見られない。これは、小さいがゆえに家庭的な雰囲気があるからであろう。しかし、さまざまな課題を実現し、学会を発展させるためには、やはり基本は会員層を厚くすることが必要である。現会員の活動を活発にしつつ、若手会

員数の増加を図る手だてを考えなければならない。実学重視や社会との接点を求める風潮、プライバシー保護の強化に伴う資料収集の難しさなどから、私は直感的にはあるが、地理学の分野で将来的に有望なのは、応用的な分野と歴史地理学ではないかと秘かに思っている。歴史地理学は基礎学問としての性格が強いが、景観の問題であれ、環境の問題であれ、しっかりした基礎的研究を蓄積していけば、応用の側面にも間違いなく足場を築くことができる。歴史地理学の将来は安泰とはいえなくても、決して暗いものではなく、私は10年、20年後にはむしろより活力のある学会になっているものと確信しているが、これは楽観的に過ぎるであろうか。

(会長・筑波大学)